

問題行動動機が中学生の問題行動に与える影響

— 大学生を対象とした回想的研究からの検討 —

The Association between Motive for Problem Behavior and Problem Behaviors

— A Retrospective Reserach on University Students —

金子 泰之

KANEKO Yasuyuki

キーワード：青年期、問題行動、学校適応

Keywords: Adolescent, Problem Behavior, School Adjustment

どのような動機にもとづいて中学生が問題行動を引き起こしているのかを検討するため、大学生を対象とした回想的な研究を行った。都内私立大学1校において質問紙調査を実施した。回収した調査票のうち大学生174名を分析対象とした。大学生に対し、①中学時代の問題行動の経験に関する項目と、②中学時代に引き起こした問題行動の動機に関する項目について回答を求めた。中学時代の学校内問題行動の経験についての因子分析の結果、授業関連問題行動、反抗的問題行動、遊ばの問題行動の3因子が抽出された。中学時代に引き起こした学校内問題行動の動機についての因子分析の結果、不快感情解消動機、楽しさ追及動機、友達からの評価懸念動機、友達への同調動機の4因子が抽出された。次に、問題行動動機尺度を説明変数、問題行動経験尺度を目的変数とした重回帰分析を行った。その結果、問題行動の種類によって、それを引き起こす動機に違いが見られた。今後、中学生を対象とした調査も実施し、中学生の問題行動動機と問題行動の関係を検討していく必要がある。

問題と目的

青少年の問題行動の実態として、中高生は規範を理解しているにもかかわらず、問題行動や非行を引き起こしていることが多いと考えられる。例えば、問題行動の多い問題生徒と、問題行動の少ない一般生徒の境界があいまいになってきており（梅澤，2002）、非行とは無縁であった少年が突発的に強盗や傷害などの凶悪な事件を引き起こす（加藤，2003）。1987年と2001年の中学生を比較したところ、2001年の中学生の方が規範意識は高いが、タバコを吸う、お金を盗むといった法律に反する行為の経験率は高くなっており、いけないことだと分かっているにもかかわらず、問題行動や非行をしている（清永・榎本・飛世，2004）。集団で引き起こされる非行については、仲間との関係が不安定な状態になることや、その場の空気がしらけるのを極端に恐れ、その場の雰囲気飲み込まれて犯行に加わっている（土井，2003）。やっではないいけないことを生徒が理解していながらも、問題行動を引き起こしてしまう動機は、どのようなものなのだろうか。

刑法では、人間を理性的で合理的であるという前提に立ち、犯罪遂行における動機が犯罪

の構成要件となる（安香・麦島，1980）。そして，非行少年が犯罪的な意図を持っていたときに制裁が加えられる（Sykes & Matza, 1957）。動機は問題行動や非行の凶悪性を判断する情報であるため，非行臨床家や教師が，少年への処遇や問題生徒への指導方針を考える上で重要な情報となる。柿木（1992）は，シンナー乱用の動機を検討し，原田（1984）は，暴力的な非行と動機の関連について検討している。鈴木・井口・高桑・小林・桶田・高橋（1994）は，非行全般についての動機をまとめると同時に，罪種別にどの動機の割合が高いかを検討している。

これまでの逸脱行動の動機を扱った研究では，少年鑑別所に収容されたことのある非行性の進んだ少年を対象とし，その動機を分類しているものが多い。同じ中学生であっても，学校内で問題行動を引き起こしている中学生と，薬物や暴力といった非行性の進んだ中学生では，その動機に違いがあると考えられる。生徒の問題行動の理由を問う指導は，教育現場において最も用いられていることが明らかとなっている（中山・三鍋，2007）。一般の中学生が，どのような動機にもとづいて問題行動を引き起こしているのかを明らかにすることは，教育現場における生徒指導のあり方を考えていくための基礎的なデータになると考えられる。

本研究では大学生を対象とし，中学生の頃に経験した問題行動とその動機を質問紙調査に回想的に回答してもらうこととする。大学生を対象とした回想的な調査を行う理由は，以下の2つである。1つ目は，中学時代の問題行動に関する回想であるため，教師に評価されることはなく不利益が生じない。そのため，中学生の頃に経験した問題行動やその動機について率直に回答しやすいと予想されるからである。2つ目は，大学生となった現在から中学校の頃を振り返ってもらうことで，より冷静に問題行動の動機を判断できると考えられるからである。中学時代の不登校（野島・三好，2004）や高校時の性体験（五十嵐・庄司，2005）のように，調査協力者にとって回答しにくいテーマを研究する際には回想法を用いて研究されている。また，白井・岡本・栃尾・河野・近藤・福田・柏尾・小玉（2005）による非行からの立ち直りの研究のように，回想法を用いるからこそ明らかにできることもある。本研究では，大学生を対象とした回想法をもとに，中学生が学校内問題行動に引き起こす動機を検討する。

方法

協力者 都内の私立大学1校において，大学生190人に調査票を配布した。文学部，法学部，経済学部，商学部などの文系学部に所属している学生であった。その結果，174人から調査票を回収した（回収率：91.6%）。学年，男女別に協力者の内訳をTable1に示した。

Table1 学年・男女別の対象者の内訳

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
男	51	7	25	2	85
女	59	10	18	2	89
	110	17	43	4	174

手続き 講義開始前の休み時間中の大学生に個別に調査の依頼をして調査票を配布し、回収した。また講義開始後、教員の許可を得て受講していた学生に調査を依頼し、一斉に調査票を配布し回収した。調査用紙は無記名であり、この調査に回答することで協力者に不利益が生じないようにした。回答を強制するものではなく、任意であることを説明した。分析については個人を特定して分析することが目的ではなく、協力者全体の傾向を把握するために行うことを説明した。得られた結果は、学術目的以外ではしないことも説明した。これらは、古澤・斉藤・都筑（2000）の心理学・倫理ガイドブックを参考に行った。調査時期は2005年6月下旬であった。

調査内容

問題行動経験尺度 井上・矢島（1995）と加藤・大久保（2004）を参考に、学校内で発生しやすい生徒の問題行動に該当する項目を27項目収集した。「あなたが中学生だった頃について質問いたします。中学校3年間に学校内で、以下のことをしたことがありますか？」という質問のもと、「まったくない」、「1回ある」、「数回ある」、「何度もある」の4件法で回答を求めた。得点の範囲は0点から3点であった。

問題行動動機尺度 原田（1984）、総務庁（1993）、鈴木・井口・高桑・小林・桶田・高橋（1994）、加藤（2001）を参考に、問題行動や非行を引き起こす動機に該当する項目を22項目収集した。「中学校3年間にあなたが1回以上“したことがあったすべての行動”の動機についてお聞きします。なぜやったのか、あてはまると思うところに○をつけてください」という質問のもと、「まったくあてはまらない」、「どちらかというにあてはまらない」、「どちらかというにあてはまる」、「よくあてはまる」の4件法で回答を求めた。得点の範囲は1点から4点であった。

結果

尺度構成

問題行動経験尺度 学校内問題行動経験尺度、計14項目について探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転、固有値の減衰状況より3因子解）を行った。因子負荷量.30以上を項目選択の基準とした結果、3因子11項目が抽出された（Table2）。

因子の解釈について、第I因子は「授業中、授業と関係ない作業をする」、「授業中、先生の話の聞かない」など、授業中に見られる生徒の態度に関係する項目から構成されていることから、授業関連問題行動因子と命名した。

第II因子は「授業が始まっても教科書やノートを取り出さない」、「全校集会で先生の指示に従わない」など、教師に対する反抗的な態度に関係する項目から構成されていることから、反抗的問題行動因子と命名した。

第III因子は「授業中に手紙を回す」、「学校でアメやガムを食べる」など、遊び感覚で引き起こす問題行動に関係する項目から構成されていることから、遊びの問題行動因子と命名した。

尺度の信頼性係数（Cronbachの α 係数）を求めたところ、第I因子は $\alpha = .80$ 、第II因子は $\alpha = .72$ 、第III因子は $\alpha = .62$ であった。第III因子の α 係数は十分ではないが、許容しうる数値であった。

Table2 問題行動経験についての因子分析結果

	第 I 因子	第 II 因子	第 III 因子
第 I 因子 授業関連問題行動 ($\alpha = 0.80$)			
授業中、授業と関係ない作業をする	0.76	-0.05	0.09
授業中、先生の話を受けない	0.74	0.11	-0.06
授業中、おしゃべりをする	0.63	-0.06	0.03
授業開始のチャイムが鳴っても着席しない	0.54	0.29	-0.07
第 II 因子 反抗的問題行動 ($\alpha = 0.72$)			
授業が始まっても教科書やノートを取り出さない	-0.03	0.88	-0.06
全校集会で先生の指示に従わない	0.06	0.56	0.10
先生から注意されたことに反抗する	0.08	0.50	0.00
第 III 因子 遊び的問題行動 ($\alpha = 0.62$)			
授業中に手紙を回す	0.17	-0.24	0.64
ブカブカにズボンを履く、スカートを短くするなど、標準制服を崩して着る	-0.19	0.22	0.61
学校でアメやガムを食べる	0.06	0.24	0.36
部活・委員会・当番などをさぼる	0.11	0.16	0.30
因子間相関		0.59	0.51 0.47

問題行動動機尺度 問題行動動機尺度，計 22 項目について探索的因子分析（主因子法，プロマックス回転，固有値の減衰状況より 3 因子解）を行った。因子負荷量 .30 以上を項目選択の基準とした結果，3 因子 14 項目が抽出された（Table3）。

因子の解釈について，第 I 因子は「ついカッとなったからやった」，「いやなことがあったからやった」など，不快な感情を解消するために問題行動を引き起こす動機に関する項目から構成されていることから，不快感情解消動機因子と命名した。

第 II 因子は「ただのひまつぶしとしてやった」，「楽しいからやった」など，享楽を求めて問題行動を引き起こす動機に関する項目から構成されていることから，楽しさ追求動機因子と命名した。

第 III 因子は「友達によく思われたいからやった」，「友達の手前やらざるをえなかったからやった」など，友達からの評価を気にして問題行動を引き起こす動機に関する項目から構成されていることから，友達からの評価懸念動機因子と命名した。

第 IV 因子は「友達がやっているのをまねたからやった」，「まわりのみんながやっていたからやった」など，友達に同調して問題行動を引き起こす動機に関する項目から構成されていることから，友達への同調動機因子と命名した。

尺度の信頼性係数（Cronbach の α 係数）を求めたところ，第 I 因子は $\alpha = .85$ ，第 II 因子は $\alpha = .77$ ，第 III 因子は $\alpha = .77$ ，第 IV 因子は $\alpha = .67$ であった。第 IV 因子の α 係数は十分ではないが，許容しうる数値であった。

Table3 問題行動動機についての因子分析結果

	第 I 因子	第 II 因子	第 III 因子	第 IV 因子
第 I 因子 不快感情解消動機 ($\alpha=0.85$)				
「ついカッとなったから」 やった	0.86	-0.19	-0.11	0.11
「ムシャクシャした気分になっていたから」 やった	0.79	-0.14	-0.08	0.13
「いやなことがあったから」 やった	0.79	0.07	0.12	-0.25
「スカッとしたかったから」 やった	0.77	0.20	0.09	-0.19
「仕返しをしたかったから」 やった	0.45	-0.10	0.26	0.08
第 II 因子 楽しさ追及動機 ($\alpha=0.77$)				
「ただのひまつぶしとして」 やった	-0.06	0.81	0.00	-0.11
「他にやることがないから」 やった	-0.12	0.78	0.06	-0.16
「楽しいから」 やった	0.07	0.66	-0.10	0.18
「おもしろそうだったから」 やった	0.30	0.47	-0.10	0.35
「なんとなく」 やった	-0.04	0.41	0.03	0.25
「誰にも迷惑をかけていないから」 やった	-0.02	0.35	0.08	-0.02
第 III 因子 友達からの評価懸念動機 ($\alpha=0.77$)				
「友達によく思われたいから」 やった	0.11	0.03	0.77	0.09
「友達の手前やらざるをえなかったから」 やった	-0.02	-0.02	0.71	0.03
「友達から偉く思われたいから」 やった	0.19	-0.01	0.64	-0.04
「友達と付き合えるから」 やった	-0.11	0.08	0.57	0.18
第 IV 因子 友達への同調動機 ($\alpha=0.67$)				
「友達がやっているのをまねしたかったから」 やった	-0.04	-0.15	0.08	0.81
「まわりのみんながやっていたから」 やった	-0.23	0.04	0.21	0.61
「やってみたかったから」 やった	0.13	0.24	-0.04	0.46
因子相関行列		0.07	0.31	0.43
			0.21	0.32
				0.45

問題行動動機と問題行動の関連についての検討

大学生が中学生だった頃に引き起こした問題行動は、どのような動機にもとづいて引き起こされていたのかを検討する。問題行動動機尺度を説明変数、問題行動経験尺度を目的変数とした重回帰分析を行った (Table4)。

授業関連問題行動に対しては、不快感情解消動機と楽しさ追及動機から正の影響が見られた。不快感情解消動機と楽しさ追及動機の2つの動機によって授業関連問題行動が引き起こされていることが明らかとなった。

反抗的問題行動に対しては、不快感情解消動機、楽しさ追及動機、友達への同調動機から正の影響が見られた。不快感情解消動機、楽しさ追及動機、友達への同調動機の3つの動機によって反抗的問題行動が引き起こされていることが明らかとなった。

遊びの問題行動に対しては、不快感情解消動機、楽しさ追及動機、友達への同調動機から正の影響が見られた。不快感情解消動機、楽しさ追及動機、友達への同調動機の3つの動機によって遊びの問題行動が引き起こされていることが明らかとなった。

Table4 問題行動動機と問題行動経験の関係

		問題行動経験		
		授業関連問題行動	反抗的問題行動	遊びの問題行動
問題行動 動機	不快感情解消動機	.25**	.49**	.18*
	楽しさ追求動機	.44**	.22*	.26**
	友達からの評価懸念動機	-.01	-.06	.05
	友達への同調動機	.12	.18*	.23**
	重決定係数 (R^2)	.33**	.37**	.25**

値は標準偏回帰係数

* $p < .05$, ** $p < .01$

考察

中学生がどのような動機にもとづいて問題行動を引き起こしているのかを大学生を対象とした回想的研究によって検討した。その結果、問題行動の種類によって、その行動を引き起こす動機に違いが見られることが明らかとなった。

まず不快感情解消動機からみていく。不快感情解消動機は、授業関連問題行動、反抗的問題行動、遊びの問題行動の3つの問題行動すべてに影響を与えていた。これは、中学校という環境が中学生のストレスを高めるものでもあるからと考えられる。中学校におけるストレスは、教師との関係、友人関係、部活動、学業、規則、委員会活動などがあり、これらによってストレス反応が生じる(岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992)。学校生活を送ることは中学生にとってストレスを伴うものと考えられる。非行前より非行後の方が、ストレスが低下する(藤野, 1996)。学校内で感じるストレスを、問題行動を通して解消している場合もあると考えられる。不快感情解消動機によって問題行動を引き起こしている場合、学校内で感じるストレスをどうして問題行動を通して解消しようとするのかを教師が考えて生徒指導を行わなければならないだろう。部活、勉強や友人との関係を通してストレス発散できない生徒の事情を考慮した生徒指導が求められるだろう。

次に、楽しさ追求動機からみていく。不快感情解消動機は、授業関連問題行動、反抗的問題行動、遊びの問題行動の3つの問題行動すべてに影響を与えていた。教師の視点から見れば問題視される行動であっても、生徒個人や生徒集団にとって問題行動は、楽しみを見出せる適応的な行動(國吉, 1997)となっている場合があると考えられる。このような中学生に「悪いことだからやってはいけない」、「規範意識を高めよう」と指導しても限界があると考えられる。むしろ中学生が、問題行動以外の手段で楽しさを得られないのはなぜなのかを、教師や親などのまわりの大人が考えていく必要があるだろう。

最後に、友達への同調動機についてみていく。友達への同調動機は、反抗的問題行動と遊びの問題行動の2つの問題行動に影響を与えていた。教師への反抗や遊び感覚で引き起こされる問題行動には友達への同調の影響力がみられた。教師と生徒の関係が悪化することで中学生の規範意識が低下し、それに伴って反学校的な生徒文化が形成される(加藤・大久保, 2005)。教師と生徒の関係が悪化している反学校的生徒文化が形成された学校においては、主犯格となって問題行動を引き起こす生徒にクラスの他の生徒も同調することによって、問題行動を引き起こしていると推測される。教師は、生徒個人レベルを対象とした生徒指導だけでなく、クラスといった集団レベルを対象とした生徒指導も行っていくことが必要だろう。

本研究の課題として、以下の2つが挙げられる。第1に、対象者に偏りがある点である。調査を実施したのは1つの大学に限られている。中学時代の成績が同程度の学生が集まって

いることや、中学時代の生活態度に大きな問題のみられなかった学生ばかりが調査対象となっていることなどが推測される。そのため中学生の問題行動の実態を反映しきれていない部分があると考えられる。複数の大学の大学生を対象に調査を行う必要がある。

第2に、対象者が大学生である点である。教師からの評価を気にせずに、中学時代のことを客観的に振り返ってもらうために大学生を対象とした。しかし、今回得られた結果が、今現在の中学生にも当てはまるとは言えない。中学生を対象に、無記名によるアンケート調査を実施し、個々の結果が教員の目には決して触れることのないよう配慮した調査が必要と考えられる。そして、大学生を対象とした本研究の結果と、中学生を対象とした研究で一致する結果が得られるかどうかを比較し、確認していく必要がある。

引用文献

- 土井隆義 1988 刑事司法過程における犯罪動機の構成 犯罪社会学研究, 13, 102-119.
- 土井隆義 2003 〈非行少年〉の消滅—個性神話と少年犯罪— 信山社
- 古澤頼雄・斉藤こずゑ・都筑学 2000 心理学・倫理ガイドブック 有斐閣
- 原田豊 1984 中学生による暴力的非行の研究2—パターン分類による特徴の検討— 科学警察研究
所報告(防犯少年編) 25(2), 172-182.
- 平田乃美・渡部正・相馬一郎 1998 非行少年の学校環境認知とローカス・オブ・コントロール 犯罪心理学研究 36(2), 1-18.
- 五十嵐哲也・庄司一子 2005 高校時の性交経験と友人関係—大学生に対する回想法を用いた調査結果から— カウンセリング研究 38, 61-71.
- 石毛博 1994 非行動機を理解について 刑政, 105(12), 28-38.
- 柿木良太 1992 シンナー乱用の動機と性格特性 犯罪心理学研究, 30(1), 51-60.
- 金子泰之 2007 学校内の問題行動に及ぼす学校集団と生徒個人の影響 日本教育心理学会第49回大会発表論文集, 283.
- 加藤弘通 2001 問題行動の継続過程の分析—問題行動を巡る生徒関係のあり方から— 発達心理学研究, 12(2), 135-147.
- 加藤弘通・大久保智生 2004 反学校的な生徒文化の形成に及ぼす教師の影響—学校の荒れと生徒指導の関係についての実証研究— 社会安全, 52, 44-57.
- 加藤弘通・大久保智生 2007 問題行動が起きる前が問題か, 起きた後が問題か?—メタ理論としての発生モデルと継続モデル— 心理科学, 27(2), 63-69.
- 加藤貴生 2003 家庭裁判所調査官の仕事と少年非行に現れた子どものこころ 現代の社会病理, 18, 95-102.
- 清永賢二・榎本和佳・飛世聡子 2004 社会規範に対する少年の態度と意識に関する研究—1987年調査と2001年調査の比較分析— 人間研究, 40, 23-36.
- 間庭充幸 2001 少年犯罪の質的変化—動機の深層とその背景— 更生保護 52(11), 6-11.
- Mills, C. W., 1940, "Situating actions and vocabularies of motive." American Sociological Review 5:904-913.
- 森田洋司・清永賢二 1986 いじめ—教室の病 金子書房.
- 文部科学省, 2005, 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査について」

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index31.htm.

- 中山勘次郎・三鍋由貴恵 2007 教師の「注意言葉」に対する中学生の受けとめ方 上越教育大学研究紀要, 26, 367-379.
- 野島正剛・三好和子 2004 特性不安および生活上のストレスと中学生時の不登校傾向との関連 上田女子短期大学児童文化研究所所報, 26, 29-41.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 教育心理学研究, 63(5), 310-318.
- 大久保智生・加藤弘通 2006a 中学生はどのように問題行動を正当化しているのか—中学生の問題行動の動機に関する研究— 社会安全, 61, 17-30.
- 大久保智生・加藤弘通 2006b 問題行動を起こす生徒の学級内での位置づけと学級の荒れおよび生徒文化との関連 パーソナリティ研究, 14(2), 205-213.
- 白井利明・岡本英生・栃尾順子・河野莊子・近藤淳哉・福田研次・柏尾眞津子・小玉彰二 2005 非行からの少年の立ち直りに関する生涯発達の研究(V)—非行から立ち直った人への面接調査から— 大阪教育大学紀要第IV部門, 54(1):111-129.
- 総務庁青少年対策本部 1993 青少年の規範意識形成要因に関する研究調査 総務庁.
- 鈴木真悟・井口由美子・高桑和美・小林寿一・高橋良彰 1994 少年の共犯形態による非行に関する研究2—非行タイプおよび集団サイズによる犯行過程の特徴— 科学警察研究所報告(防犯少年編), 35(1), 13-28.
- Sykes, G. M. & Matza, D. 1957 Techniques of Neutralization :A Theory of Delinquency American Sociological Review,22, 664-670.
- 坪田眞明 2006 児童生徒の問題行動等の現状と対策について(下) 警察学論集 59(7), 170-195.
- 梅澤秀監 2002 生徒の問題行動に対する教育現場からの報告 現代の社会病理, 17, 41-48.
- ト部敬康・佐々木薫 1999 授業中の私語に関する集団規範の調査研究—リターン・ポテンシャル・モデルの適応— 教育心理学研究, 47(3), 283-292.